井子承秘傳書

大人

小児 療治方 全

ヤ 9
457

因國新說因孫

奉事

門 武 帰 巻 457

井子養秘傳書

目録

一 小児むしはけ養子よく治して死をのがる秘傳
一 小児を無事にそだつる秘傳
一 腹をはんそむしはけるを知る秘傳
一 驚風をしる秘傳
一 子そだちの初記とりはみをしるを論のる
一 むし乃評論
一 疱瘡の養生乃の秘傳

一瘍の付病氣より三つのうけなる事
　　并瘍ぐい氣病ゑて死せるものぐすりもの秘傳
一虫死い蛇毒（ジイチウ）のうざたる事
　　并毒をとのぐすりもの秘傳
一蛇毒ときてもありてへたれざる事

目録終

井子兼秘傳書

小児むしはやみ并あく治て死とのぐすり秘傳

小児生れてより尚産毒のうざそなるむしあり毒危し用事もれば毒なれば毒と業をそ治を厚く切食をかづでも給やうにすれば腹は蛇毒（ムシ）湧されなるいろくの病おこる小児のむしとりあい共也

腹は蛇毒湧てもありて〳〵命はびむし〳〵和てるを殺もつよくかりく毒をとり病起ざるやう又病おこりても治やう有る記也

○小児ほど脾胃のよわきものゝ食のみふ甘き菓子
などを食ゝ脾胃のよわき人のごとく滞りて
ものゝ消化せざるもの虫の湯にてを
煎じ飲ましむべし
○蛔虫腹痛ハ綿の油にて上り臭を留るもの
ひげ付にて死るもの虫ハ糸のごとく雷鳴の
ごとく箸のごとくなるもの
中ハ細くなる虫あり虫の多くあるを知べし

○腹ハ蛇虫湯ハ綿の油にてつゝ抽出
指ゝてさゞれバ動まる也日を強く動かせ心ゆ
上り心下ハ強くうゞつゝも蛇湯(イナ)ハ綿を
さゝるゆゑ綿の病おこる虫を吉ハ後のゞ
つき安ようてよくあるゝ
○三ヒ六巣ハ後ハ虫涌しるゝ心付ハ虫ハ
綿に上り臭を留るゆゑ心ゆゝうちハ
心下ごゝつきう強ゆゑ悪ハ綿の力に上り
く後ハ虫にさゝるの安る虫綿の力に上れば

ありて死〳〵く時口鼻より血あるものあり

○七八九十日頃より[illegible]りても猶胃の力尽らず食

るれば出るれおそく癒ずして疱を生じ表に発出ざる故

いろ〳〵の病を[illegible]を疱瘡初稍くい薬もさらにあり

ることを殺さるものあり

○達者にて走り遊ぶる時は疱瘡湧くるものも

それを知らざれば疱瘡初まりて薬もさらに内に入て語て

死する色を時は[illegible]て[illegible]は赤黒く

初稍て赤くなり湧ふに黒色を為るもの[illegible]りてい

霊丹妙剤もこれなるべし

○全躰後の中ふ疱瘡ハ[illegible]の湧ることを

知ず付ざれば初まづ後を見ずく疱の湧ることを知り

疱を去る業を用ひ小児を[illegible]にする数の医書

なれ故よ世人も知ずして[illegible]を殺さるを[illegible]

試みて[illegible]蛇疱を[illegible]ば[illegible]ふ病起らず[illegible]成

長さるを知らしむ

小児を[illegible]にそぐつる秘伝

小児の[illegible]ハ成長せんるを[illegible]で病[illegible]

追蟲湯を毎月一服宜し用ひ来るの小児人
ともろ手本如

追蟲湯

海人草 水にて洗ひ刻みかるうして五分
苦楝根皮 せんたんの根の皮上の白き皮をこそげ白き木を刻みこなして四分
陳皮 二分
牛夏 二分
茯苓 二分
白朮 三分
枳殼子 四分
甘草 二分
黄連 二分
百部根 三分

右煎服を毎朝元来蛔虫を去るの水の初めに

流行すべし小児ふ[illegible]用ひて虫あれば去りて
病起りしび病起りても毒を用ひずよく治を
試みるべし

服を見て虫を知る秘傳

小児指の虫漏ぐらを見るに紙屋入れ方法作用
して虫を伸させ三ツ指にて四方を探るべし
拇の内ぐりつくものの色四方ぐりつき黒く
筋浮きたる虫上へ向ぐりつき赤色
拇の内へ上る四方ぐりつき黒く筋浮きたるバ

消虫湯一服[illegible]

消蟲湯

使君子 剉 壹夜　槟榔子 五分

苦楝根皮 剉 方寸匕 五分　甘草 二分

唐木香 二分

右煎服一次追虫湯を用ひてよく効あり

驚風と云る秘傳

二三歩の子驚風のあらんとする時 ちからを抑へ強るハ

虫ともなりて心ちよろしからず

[illegible] 二三歩 七八歩あるいハ数日あるいハ数月あるいハ

あるハ 俗にいふ不合もの うつむけよ病ハ

鼻の上青筋出る 津液を多く吐 小便通じ

ふくれ彭ふくれうを出る 虫ぶくれ ふくれる 追虫湯 追ハ小便通ず

後ものをいぶくつを出来る こんのうもれる

ねむし後痛む 世俗名虫の物を無

右の二方を用ひ時ハ大便分虫出て心能なる

子をだもの所 さとりを[illegible]を編の

世ふる育の所 さとりをして二三歩又ハ

五七八歳にて死するハ皆蛔虫沸るを主とすべし
おりてゝ〻ゑゝる病の業のゝ〻ゑゝる病のかを治
せゞ後のうちを害まるゝあるかゝ死まる
もこれ今の時ハ稀なり又ハ産の時血乃わざ
みよりも熱のゝとゞまりて復ゝ発ゝ〻や
を発をゝる療治をせゞゝておりてゝ〻ゑゝる
病の療治ハ快気せゞを発ゝるまを
知らゞ発初ゝ〻ゝ〻ゝ〻ハ業ゝゞ
後ゝ死をゝる

○小児の病気ゝ〻ゑゝゞゝ用ゝ追毒湯を打〻
用ゝし発ゝゞゝゞゝりて益達者ゝるべゝ子
育のゝゝことゝゝるのゝを知べゝ

むゝ乃評論

元来蛔虫ハゝゝゝゝ人ゝゝ蛔虫ハゝゝ
ゝのゝゝゝ元ハゝゝゝゝ食胃ゝゝゝ
熱の業ゝゝ湯ゝゝ何湯ゝゝゝ
○子の生ゝゝゝ父母の精気和合ゝ種ゝゝ
子ゝゝゝ父母発を付て種ゝゝゝゝ発のゝゝ

やうに生じて毎日悪い湯也湯にても悪く見え
ざるれば病勢よ拘らず悪を去る薬を用ひべし
蛇毒を去ざれば悪敷なく命を取る也
○栗子栗柿の枝をぐく花よ悪いもの一薬として
毎日悪湯也悪湯ゟ薬ハ早く効て満足ゟ
○蛇毒ハ湯にても悪しく成ゟ
悪をぶるもあり危ゟ也
○又悪をあつまハ
悪の湯性の人ハ黄芪も湯也あつを
ハ湯ゟ

ハ悪を去ざれば悪也
悪にても薬効なく
ハ一杯蛇毒の治方ハ医書ゟ
の如く遠ゟ
疱瘡の表
疱瘡の表熱ゟ蛇毒湯也
ざれハ疱瘡遅く
始發熱の時ゟ
○疱瘡流行の時に
ハ悪を去ざれば悪也
悪にても薬効なく
ハ一杯蛇毒の治方ハ医書ゟ
の如く遠ゟ
疱瘡の表
疱瘡の表熱ゟ蛇毒湯也
ざれハ疱瘡遅く
始發熱の時ゟ
○疱瘡流行の時に

を用ひ一日毒を出し二ツ大使ようちして熱さめて
疱瘡ふそいちりしまし出　熱色あるを
一疱瘡の熱と如何数の業を用ひば出い
ちりじ熱い去りじ涼よりあちちと熱ゑ故
疱瘡毒の熱の表追出湯一服を用ひば出あるとば
解一五徳よく効る加疱瘡も自然と事よ
志ばゑ出し後よ出あれば疱瘡去ばげても蛇
出ひ解くるとと成る
○小児食を喰ふ事ふ十ヒ日業中ぢい

ずく追出湯一二服用ひば毒のあるを一きて
世上よ知ざる不也試ふるべし表へ知まる先後よ
蛇出湯て害を為ものも後しるべし
瘡の付病乳よ三ツの見けある事
瘡ぐい乳病ふて死るものがもう秘伝
世よ治一ぐさむつりく病をらうとしてをらう
といふよ三ツのとけあり一ツまハいらう見を乳瘡
とふ二つよハ體らう見をみ後のらうとして三ツよハ
蟲積らう見い表へ知まるでむつりく見てらうハ

法ゆるとおこる病也所謂上実と書也

○四らうとゆハ十七八年いらゐ
ざ月経充満せざるゆ小さら
ず経閉ゆ初産ゆ人ゆ産まれて世上を初め
心配多くて月日を累ねつもりて
積滞へ初でをいてみゆ初ゆる初産と
初て産ゆ産もせず達者もなく病と
初ゆ又一遍ゆ心亜病出来て気弱く人ゆ
いそれぬゆ初ゆ初ゆるゆ治ぜ初ゆ
なく心労つもりて神気のいてみゆ初く気色

血も虚して又脾の力弱ければ
業をも救ぐ〜ゆ性の人いかさいゆ力を
出て何ゆもゆそうゆ初べきと
初ゆ脾ゆ出ず業を見ちゆば近く治ぜず
業い飯脾湯よろし

飯脾湯

人参　白朮　茯苓　當飯
遠志　酸棗仁　黄芪　龍眼肉
甘艸　木香　各等分　甘草木香半減

右黄服もぐし或ハ煉薬にして用て可
○體らうといふハ世ごろ世ろなれぬるふ不平奉ひなる
出ものらぬる人或朋輩中もつてきなどを
て呼り者といふ親のもうてまづ勧めといふよ
ようを非ずく勧めいつとるく心配又猶〳〵驚きいとみ
て病と成ものなり又落ものはれて世業をも
をざるふ日〳〵根気をつめせねバ成ぬと思ひ
を理よ働きいつとるく又猶のいてをと成て起る病
なりをいまぐ世をもかれぐだも気もかをまふ

ざるふいつとるく猶猶の病をと成て起りくる
病みて色よ歩行家るるも気ふ肌よもつて
思ひぐ和たかんもんの事を傷て起る病ひ肌
なりてハ何の種よりも世病気いとよく
気と分黄と益気湯を用ひて虫生させて
気ちんおそくてハ報ひがたかるべ〜

益氣湯

人参　黄芪　當歸　白术
陳皮　甘艸各等分　升麻少　柴胡少

○蟲積らう気に成候時は男女共に成る事有り
瘧とう食の物うけ〳〵滯りて又は熱出て復
す虫湧物あり胸腹に痛て不絞ともはかどこ
ろ無し〳〵氣むつかし〳〵腹又虫腑胃を
侵さざる故不食と成て又瘧病よう
瘧をなす〳〵吸せうの嗜物をらうがいと名
付むつかし〳〵心迷又氣病〳〵虫出て
氣を時ふし或は寒を多く出て人事
病の如し虫の出る時は藥治なき故に業遠出て

走る時は不治脾〳〵痩衰〳〵腹の内の弱りも
とうて補業を氣とる物なれば補業却て浮業と
成りて害と成るを知らず虫は腹に充し氣病は
なりて腹に快氣せず病人
心中を指の先にて撫るごとく腹法
とる事でつきそうて古布巾を当てゆる
でゝなるものも気虫に成て上へ上がつてもる
徒概も清蟲湯二服蘆會の粉燒にて
入て用ひる追蟲湯を用べし虫去りて

心下痞ふさがり透とく心よくなるべし予数年
試しに是て能治せるものを有とす
○錦嚢瘡瘡秘録ならうさいの療法一つまハ
虫を殺を二つまハ元気を養ひとあり道三前の
らうさいハ唯虫を殺をべしとある也
彭記ハ蛔蟲のことをいふ
蛔虫のくるしむ秘伝
蛔虫のくるしむを不審とそうつ人もあるべし且
世虫小児ばかりにて大人にハなきと思ふ也

蛔蚘のわき虫を大便より出し口より吐出すなり
一つまでも殺すべし殺すべし虫をなすを去さ一人なれば
心を虫を命を落すを見ると脾胃不調血気虚衰
ゆえ日を経て土を[illegible]をもつて多くなり
心下苦く筋張でつさうゆくる事出来る也
人はんてゆくべし追虫湯を用べし疾を
退け心下を透し胃の不順を調虫を去
心下透き後よく[illegible]物後痛むなくなつて
るなくば消虫湯二服用て又追虫湯を用べし

蛔を吐出すにはこれをぜ〳〵古く通り用ひくを
腹痛〳〵ふ腹つきゆるるきハ蛔出〳〵もあるハ
用ぜ〳〵全快をぜ〳〵腹の痛むを堪ひく用ひ
ぜハ腹を害あるべ〳〵

蛔虫湯てもあるべくハ用ふ事

一腹痛みて病ることあるハ人の腹に蛔虫あるを人
多くハ知ず危きことも或人五十歳年を達者
物ゝが予が蛔虫ハ一廻るものゝいまゞ病ることあるべ
うちに解をなす用ゆゝ蛔虫とりを伝ぜく追

蛔虫湯二服を用く蛔虫ちりし又三十歳年の女
積みて腹ひろきゆゑ右の薬服せ〳〵ふ蛔虫二ツちりぬ
出女蛔の大腹ひろりてりるを心ゆるゝして服ぜるをき
訪りて用ひ〳〵ふ蛔又二ツちりく心下をきそ
全快〳〵ぬはあ人蛔の湯ぜふ心分ぜハ蛔虫ハ腹く
治ふくもあるべく人命ぜれバ腹病の薬を与へ
用ひ蛔ハ解せゞ腹ハ治りて治るハ心を要きて
ちらぜ命を為をぜ〳〵

○又六十ゑ腹の女積みて数医の薬を服〳〵共益

不食して骨と皮とよ瘦衰て四肢ふるへ既に死
んとせしを予脈をみるに細数にして久費不食して
虚しるを見て按をくんるに心下に按拳のめき
かゝりあり是云歳費堅くして助り難し
と予云是蚘虫の毒あるうちい菓を多くと則
潰虫湯を大服のみくに二服目ひしふるき虫に
二十余吐出し少の泥なるゆりて四肢とゆる
次に追虫湯を二服目ひしに細き虫七ツ吐て
少の泥なゆり粥を食べしと食付快気せり

また蚘虫を去るに法は如死もぐしきを以て
ありてそれとうんぬべして虫の湯て害を殺を
知るべし

○七十歳計の人後病に食を止て医師食滞と
して薬を与ふるに治不食して心下に痞と云
予これをうんるに脈静にして積の徴を按をくんる
に少の板のめくふ拳にして古き布帛を固るがめ
を含く蚘虫の毒を依て追虫湯を按せて
めしふ虫二ツ吐て後病癒ぬ虫ひ絶て退ゆくと

もろもろ薬ハ虫を退けんとすれども虫苦しみ動く
故に腹痛むを痛をはらひ六薬を用ひざ
十日程にして死もう痛みを堪へ用ひば虫弱
きて死を免ればきふ悩さるもの虫の為に
害せられもろもろ
○老人病ある人参朮を積痞して
薬を用ひて効なく好給合と思へども死を世界の
病人常を指先にして探り見るべし心下堅く
むすつきるべし蛇虫湯て安神するもこれハ

始め消虫湯を二服用て次に追虫湯を用べし
し腹痛むるの時虫ひ補ちと知るべし右
二服の薬打ち用べし自ら虫去て全快をべし
知る角地るべきハ蛇虫紅年に浸ぶ老年に
効りても併湯べきや討敵べし故に積痞と
只一時ハ多く右二服の薬を用ひ治和の死を免る
べし併遠者知人ハ虫を補て腹中にて害を
為す時ハ急死なべし常に心下堅うふぐ
つきるべし打べし酒を呑とも虫ひらく追虫湯を

一二服づゝ用ひ膿を去り心下を透し悪あれば去りて後中脘を補ひ元氣を養ひて諸病起るべし

○何病にても長病の人は薬のうふ追悪湯を用ひ悪あれば去りて薬の利を〻悪湯にても表へ引えだみ鍼を灸げ外の薬利ぐゝこの二薬は何病にも用ても障らず試みるべし

○十五歳以女子熱多くて食なくて動むつゝ〻打〻後いとみ五七日も医師の薬用て治せず予

疱瘡と知りて追悪湯を用ひふ大便よう悪しかりて合をを快くゆるし

○十二歳以男子さの〻病氣も去〻不食みて悪寒〻も後を引くよ心下澤〻ぎつゝき筋脈ようきと疱瘡湯〻心下〻上りうる也伝〻

足消悪湯二服を用ひ後追悪湯を用ひしうば去る悪にうありて食をを心下楽〻うふ後りて快〻後もとう

○凡て悪初て心下へ上り強へ去迫を死をふ

卜にて用治をゞし心ちく上をゞむるおち漏くゞ
つき筋沸うあるを述るゆ。蟲毒霍乱ゆ柏子ゆ
消蟲湯を用ひ次に追蟲湯を用ひゞ上ゞ
消毒湯ハ上〳〵上ゞうを治を

井子兼秘傳書終

仁

後編牛誕 自先編十年後之作也